心を動かす、
日本を元気にする
観光・レジャーのプロデューサー
応援情報誌

# とーりまかし

vol. 74
2023年12月号

目次

地球コクリ！2023
探究型教育&人材育成プログラム
2 子どもと大人で共創する地域産業の未来

静岡大学共同研究
「キャリア教育に余暇の過ごし方の視点を取り込んだ教育プログラム開発」他
14 旅は人生の「必修科目」？旅と教育

「帰る旅」プロジェクトレポート2023
22 旅人と地域の関係性を拡張せよ！「帰る旅」がもたらす新たな旅の形とは

連載
先進事例に成功のヒントあり
28 持続可能な「DMO経営」学 自ら創れ！地域の起爆剤となる食・買・泊の自主事業

価値と感動を生み出す人にインタビュー
32 マエストロの肖像
写真家／会社員
toshibo

Nostalgic but Innovative
ちょっと気になるおみやげ手帖
34 ふうき豆（山形県）

## とーりまかし [torima kasi]

### インドネシア語で「ありがとう」の意。

日頃からお世話になっているクライアントのみなさまにありがとう、読者のみなさまにありがとう、そして私たちに知恵を提供してくれるすべてのみなさまにありがとう、という感謝の気持ちを込めて、この名前をつけました。ちなみに、じゃらん「jalan」もインドネシア語で、「道」「プロセス」の意味です。「jalan jalan」で、「散歩する」「ブラブラ出かける」「旅行する」などの意味になります。

# 地球コクリ！2023
## 探究型教育 ＆ 人材育成プログラム

# 子どもと大人で共創する地域産業の未来

**じゃらんリサーチセンター（JRC）は、地域の未来の担い手を育てる「探究型教育＆人材育成プログラム」の研究を始めた。その手法と現時点での成果を報告する。**

イラスト／武曽宏幸

### 地域は労働者不足で生活維持も難しくなっていく

日本の人口減少の影響を最も大きく受けるのは、「地域」である。例えば、リクルートワークス研究所は2023年に「2040年の生活維持サービス充足率」を予測した。それによれば2040年、東京都・千葉県・神奈川県・大阪府では生活維持サービスを提供する労働者が足りる一方で、他の都道府県は、労働者不足で生活維持サービスを満足に受けられなくなる可能性があるという。特に、岩手県・新潟県・京都府では充足率が60％を割るという数値が出た。「地域の担い手不足」の問題はすでにさまざまな面で顕在化しているが、このような調査や研究を見る限り、今後さらに進むことは間違いない。

### 地域の担い手不足を解消するカギは「小中学生」だ

じゃらんリサーチセンターは、2022年から「探究型教育＆人材育成プログラム」の研究を始めた。小中学校の「探究学習」[※1]の時間を使って、子どもたちに地元の産業について探究してもらう学習プログラムだ。最大の目的は、10年後、20年後に地域産業を盛り上げる「地域社会の未来の担い手」の育成にある。

地域に生まれ育つ子どもたちの多くは、成長すると故郷を離れ、大都市圏に暮らすようになる。そのうちの一定数が地域に残るか戻るかして、地域の担い手になってくれたら、労働者不足を解消・軽減できるはずだ。そのためには、小中学生のうちに地域や地域産業と関わり、愛着を持つ機会が欠かせない。なぜなら、子ども時代の愛着が地域とのつながりを形成するからだ。中学校卒業までに地域産業との関わりを持たないと、高校・大学以降は大都市圏などに進学・就職し、地域産業と関係のない人生を送ってしまう可能性が高いのだ。

この取り組みは、学校と地域の大人たちが協力してプログラムを創るのが大きな特徴だ。子どもと大人が地域産業の未来を共創するのだ。

塩尻西部中学校でプログラムを受けている生徒たちと関わっている皆さん

※1 探究学習（総合的な学習（探究）の時間）／総合的な学習（探究）の時間は、変化の激しい社会に対応して、探究的な見方・考え方を働かせ、横断的・総合的な学習を行うことを通して、よりよく課題を解決し、自己の生き方を考えていくための資質・能力を育成することを目標にしていることから、これからの時代においてますます重要な役割を果たすものである。（文部科学省Webサイトより）

探究型教育
&
人材育成
プログラム
とは?

# 地域の未来の担い手と意志ある大人たちが地域産業を共創する「探究学習」

**じゃらんリサーチセンターは、赤井友美[※2]さんと共同で「探究型教育&人材育成プログラム」を研究している。これからの社会を生きる上で必要な能力を高めるとともに、学校を中心とした地域の大人たちのつながりも創出する、新しいタイプの探究学習プログラムだ。**

## 子どもたち・大人たちが「関係の質」を高めることを重視

「探究型教育&人材育成プログラム」は、小学校5年生～中学3年生に地域産業と親しんでもらい、地域の未来の担い手を育て、中長期的な地域づくりにつなげることを狙う取り組みだ。現在は2022年から、中学3年間のプログラムを展開している最中である。将来的には小学校高学年も視野に入れている。

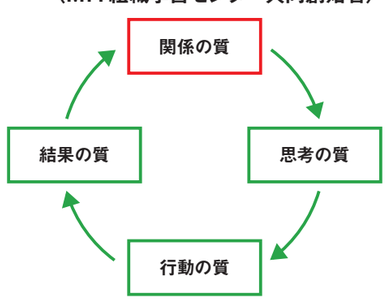
本プログラムでは、第一に「関係の質」を重視している。なぜなら、成功循環モデルに従えば、関係の質を高めることが、思考の質・行動の質・結果の質の向上につながるからだ(図1)。生徒たちにとって、地域の働く大人たちと接したり、共創したりすることは、学校や机上に閉じない多くの価値観に触れる経験になる。人や地域とのつながりが生まれ、「自分と地域」「自分と社会」を感じることが日常的になるはずだ。そうすれば、日常的に「自分はどう生きたいか」「自分は社会や地域とどうありたいか」を考える機会をつくり、行動する人が増えるだろう。行動が結果に表れるようになり、これまで以上に地域や社会が元気になっていくことが期待できる。

このような生徒と地域の大人の関係だけでなく、生徒たち同士、学校と地域など、あらゆる面で関係の質を高めることを目指している。

## 学校と地域の共創体制がより良い地域づくりにつながる

第二に、本プログラムは学校と地域の共創体制づくりを重視している。子どもたちが学校外の社会について主体的に調べて考えるものだから、学校外の知識やつながりが必要になる。多くの先生が多忙を極めることを踏まえると、先生だけでプログラムを制作・実行するのは不可能に近い。しかも、小中学校の先生は数年で異動になる可能性が高いから、仮に突出した能力を持つ先生が独力で優れたプログラムをつくれたとしても、その先生がいなくなった途端、再現できなくなる。しかし、地域産業を対象とした学習プログラムは、当然ながら地域ごとに内容が異なるため、全国一律ではなく、各地域・各学校が自分たちに合ったものを用意する必要がある。

**図1　ダニエル・キムの成功循環モデル（MIT組織学習センター共同創始者）**




※2　赤井友美さん：(株)4smiles代表取締役。(一社)未来共創イノベーション代表理事。(一社)イマココラボフェロー。神山まるごと高専評議員。熊本県南小国町、山形県鶴岡市、香川県三豊市等の教育委員会アドバイザーを歴任。

そこで欠かせないのが、地域の協力だ。学校の先生たちと地域の共創体制を構築できれば、その地域に根づいた学習プログラムを継続的に用意し、実行できるだろう。その結果として、学校と地域の関係性が深まることは、他の面でも地域にとってプラスにつながるはずだ。

本プログラムは、先生だけでなく、地域の意志ある大人たちにさまざまな面から関わってもらい、学校と地域の関係の質を高め、持続的な共創体制を築くことを目指している。

## 子どもたちの「主体性」を回復する

第三に、本プログラムは小中学生たちに、社会人や大学生と同じように「答えのない問い」に向き合う経験をしてもらい、「自分ならどうするか?」を真剣に考えてもらうことを目指している。なぜなら、小さな頃から社会人・大学生と同じような実践的な探究の訓練を積むことが、自身の経験と自信になり、社会に出たときに役立つからだ。

2017年から改訂された新しい学習指導要領は「生きる力」を最重視している。子どもたちが生きる力を高めるには、まずは自分で考えて行動を起こす姿勢を獲得する必要がある。私たちはそれを「主体性の回復」と呼んでいる。これは生徒たちの主体性を回復させ、生きる力を高めるための学習プログラムである。

本プログラムでは、生徒たちはさまざまなツールを使いこなしながら、自分たちで調査したり、企画アイデアを出したり、成果物を制作したりする。実際にビジネスのプロが行うのと同様のプロセスで、答えのない問いに取り組むのだ。

驚くことに、彼・彼女たちはツールを使いこなすスキルを短期間で身につけ、自分たちの力でやり遂げる。これこそが「主体性の回復」である。このときに最も大切なのは、先生や親、周囲の大人たちが、生徒たちを信じて任せることだ。

主体性を回復するときには、生徒たちに「デイヴィッド・コルブの経験学習モデル」(図2)を回してもらうのが効果的だ。本プログラムは、経験学習モデルを回して、「自分たちにも地域産業を盛り上げる糸口をつかむことができる」という成功体験を得てもらうことを目指している。

まとめると、本プログラムは9つの原則を重視しながら開発している。①生徒たちに答えのない問いを与えること。②生徒たちが主体的に取り組めること。③毎年同じように実行できること。④地域に特徴的な何かを扱うこと。⑤地域の人たちと接すること。⑥持続可能性の視点を持ってもらうこと。⑦子どもたちを中心に地域の共創が生まれ、新たな価値を創造すること。⑧実社会のように顧客を意識すること。⑨生徒たちが自ら経験学習モデルを回すこと。

なお、私たちは探究学習を図3の位置づけで捉えている。本プログラムは、21世紀のVUCA時代、多様性の時代に適した学習方法である。

**図2　デイヴィッド・コルブの経験学習モデル**

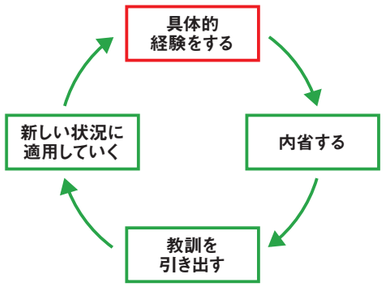
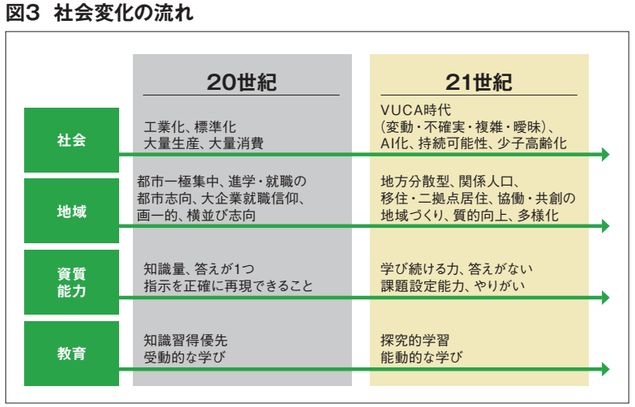



**図3　社会変化の流れ**



探究型教育
&
人材育成
プログラム
実証事例

# 塩尻西部中学校での実証実験 子どもも大人も変化している

**私たちは2022年度から、長野県塩尻市立塩尻西部中学校で実証実験を始めている。2023年度は全学年で異なるプログラムを展開している。子どもたちの学びの成果や生の声とともに、関わる多様な大人たちの声も伝える。**

**図4　探究型教育＆人材育成プログラムの全体像**

| 1年生 | 2年生 | 3年生 |
|---|---|---|
| ふるさとぶどう学 | 企業魅力化コーディネーター | チーフ・フューチャー・オフィサー |
| 地元の名産品を探究する | 地元の企業を探究する | 地元の未来を探究する |
| ↓ | ↓ | ↓ |
| 自分たちで廃棄物を使った商品を開発して店舗で展示販売・広報 | 自分たちで地元企業の魅力を発見・発信する求人動画や求人広告を創る | 自分たちで地元を良くするアイデアを生み出して自治体に提言する |

## 3年間で塩尻を深く知り地域の魅力を感じ取ってもらう

塩尻西部中学校は、塩尻市西部の宗賀・洗馬地区の生徒が通う中学校だ。ぶどうやレタスの畑に囲まれたのどかな田園地帯にある。

2021年度は1年生が総合的な学習の時間に「桔梗ぶどう学」として、地域の大事な産業であるぶどうを「知る・わかる」探究学習を行った。2022年度からは、じゃらんリサーチセンターと赤井友美さんが関わり、桔梗ぶどう学を発展させる形で「ふるさとぶどう学」を実施している。知る・わかるを超えて、「ぶどうをとりまく地域の魅力を考え、社会に伝える授業」に進化させたプログラムだ。半年間にわたって、ぶどうにまつわる2種類の廃棄物を活用した新商品開発と、広報・販売促進に取り組んだ。

2023年度からは、2年生と3年生のプログラムも始まった。

2年生の「企業魅力化コーディネーター」は、子どもたちが地元企業を自ら取材して、企業の魅力を自分たちなりに見つけ出し、求人記事や求人動画を作成する探究学習だ。上手にできた求人記事・動画は、実際に企業に使ってもらう予定だ。

3年生の「チーフ・フューチャー・オフィサー」は、子どもたちが塩尻の人たちにインタビューしながら、地域課題と解決策をとらえ、自分たちなりの理想の塩尻を考えて提言するプログラムである。塩尻市では、市長がその提言に耳を傾けている。

3年間を通して、子どもたちは地域の特産品、地元企業、地域課題を深く知り、塩尻の魅力を感じ取ることができる。なお、各プログラムのスケジュールは図5・図6・図7のようになっている。

**図5　ふるさとぶどう学のスケジュール**

| | |
|---|---|
| 5月 | オリエンテーション／ぶどう農家さんの話を聞こう |
| 6月 | ぶどうについて調べよう |
| 7月 | ぶどうの廃棄物について調べよう／ぶどう笠かけ |
| 9月 | ワインメーカーさんに話を聞こう／ぶどうの収穫体験／商品企画のアイデア出し／アイデアを周りに知らせるチラシを作ろう |
| 10月 | 試作品候補決定のための校内投票／ジャムのパッケージ作り／「株式会社塩尻西部中学校」の担当チームに分かれよう |
| 11・12月 | チーム活動（パッケージチーム、コンセプトチーム、ホームページチーム、チラシチーム、動画チーム、メディア・広報チーム） |
| 1月 | これまでの学びを整理して、プレゼンテーション資料をまとめよう、練習しよう |
| 2月 | 発表会／自分の学びを振り返ろう |

田園地帯にある塩尻西部中学校

## 地域教育協議会の学生支援コーディネーターが授業を行い、先生はコーチ役に

この学習プログラムの大きな特徴の1つは、先生たちとじゃらんリサーチセンター、赤井さん以外にも、塩尻市のさまざまな人たちに関わってもらうことにある（図8）。

学校と地域のつなぎ役を担うのは、「学校支援コーディネーター」の山本さんだ。塩尻市内での長年の営業経験を活かして、コーディネート力を存分に発揮してもらっている。

探究学習の授業を先導するのは、先生ではなく、横山さん、星井さんをはじめ、校内で読み聞かせなどを行ってきた「地域教育協議会」の学校支援ボランティアの皆さんである。

一方で、先生はコーチ役として生徒たちを見守り、悩んでいるときや行き詰まっているときに相談に乗ってもらうようにした。なぜなら、このプログラムの目的の1つは、多忙な先生方の負担をできるだけ増やすことなく、生徒と地域の接点を創ることにあるからだ。

全体アドバイザーは、「塩尻商工会議所」の篠原さん・谷田部さんにお願いしている。ふるさとぶどう学では、どの廃棄物を活用するか、製造・販売を誰にお願いするかといった相談に乗ってもらった。企業魅力化コーディネーターでは、2年生が取材する地元企業の選定やコーディネーションに関わってもらっている。

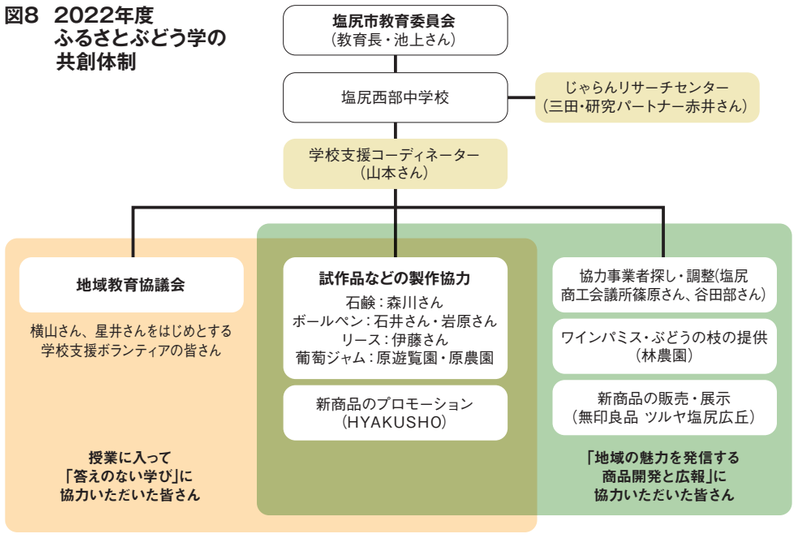
**図6　企業魅力化コーディネーターのスケジュール**

| | |
|---|---|
| 5月 | オリエンテーション／さまざまな求人広告があることを知ろう |
| 6月 | 自分の価値観や職業観を整理しよう／エントリーシートを書こう／求人動画チーム・求人記事チームに分かれよう |
| 7月 | 担当する業界・仕事・会社について調べよう／質問作り、問い作り／話の聞き方、接遇マナー講座／人事担当者にも話を聞こう |
| 9月 | 実際に企業に行って、取材しよう |
| 9・10月 | 取材してきたものを形にしよう／企業の人に見てもらい、嘘がないか確認しよう／これまでの学びを整理して、プレゼンテーション資料をまとめよう、練習しよう |
| 11月 | 発表会／自分の学びを振り返ろう |

**図7　チーフ・フューチャー・オフィサーのスケジュール**

| | |
|---|---|
| 5月 | オリエンテーション |
| 6月 | 自分の価値観と、それを大事にしたシーンを思い描いてみよう／自分の理想の環境、地域を描いてみよう |
| 7月 | 理想の未来をまとめよう／問い作りをしよう／インタビュー対象を決めよう／ |
| 7〜9月 | 仮説・自分なりの考えを出して、仮説対象者にインタビューしよう／自分だったら、こんな解決策が考えられるのではないか？／プレゼン資料作成／ミニ発表会＆ブラッシュアップ |
| 9月 | 発表会／自分の学びを振り返ろう |
| 11月 | 発表会 |

**図8　2022年度 ふるさとぶどう学の共創体制**




さらに、ふるさとぶどう学では、ぶどうのジャムは原遊覧園・原農園に、試作品と商品は森川さん（石鹸）、石井さん・岩原さん（ボールペン）、伊藤さん（リース）に作ってもらった。廃棄物は林農園の提供である。プロモーションはHYAKUSHOに支援してもらい、新商品の展示・販売は、無印良品ツルヤ塩尻広丘に協力してもらった。

学校支援コーディネーターの山本さん（写真中央）

また、企業魅力化コーディネーターでは、地元塩尻にある銀行・メーカー・建設業・病院・老人介護施設・小売店・飲食店・サービス業などの皆さんに協力してもらっている。

以上の皆さんには、必要に応じて生徒たちと直接関わってもらっている。社会人との接点が少ない中学生にとって、「地域の働く大人たち」が働く姿を生で見る機会は貴重である。

学校支援ボランティアの横山さん（写真左）がふるさとぶどう学の授業をした

## 塩尻西部中学校 1 年生

# ふるさとぶどう学

### 主体性の回復に欠かせない「オリジナル授業用スライド」

ふるさとぶどう学では、生徒たちは6種類のチームに分かれて、4人1組でチーム活動を行う。その際はオリジナルの「授業用スライド」を使用する（図9）。特徴は、「生徒たちが主体的に取り組めるようになっている」ことだ。スライドに沿って進めれば、自分たちだけで新商品のアイデアを考えたり情報を調べたり、広報物・販促物を制作したりできるのだ。生徒たちが主体性を回復させるために欠かせないツールである。

制作の際には、グラフィックデザインツール「Canva」をはじめ、さまざまなツールを使用する。生徒たちは、たった4カ月でこれらのツールを使いこなし、チラシやニュースリリース、商品パッケージを創り上げるまでになるのだ。

**図9 授業用スライドの一部**

生徒たちはこの6種類のチームに分かれて探究学習を行った

最初に、3カ月間の学習の流れを提示し、スケジュール感を示した

次に、各チームに必要な基本の方法や型を手渡した。たとえばホームページチームなら、サイトマップ構造である

そのうえで各チームに向けて、このように書き込んだり貼り付けたりしていけば、自分たちだけで主体的に取り組めるスライドを用意した

**2022年度ふるさとぶどう学の研究成果をまとめた映像です。ぜひご覧ください。**

### 生徒たちの声❶

- 最初は、本当に自分たちでチラシなんて作れるのかなと思いました。でも、実際にやってみるとデザインを考えるのが楽しくて、でき上がったときには達成感がありました。地域とちゃんと向き合ってみたいと思うようになりました。（青柳結唯さん・1年生）
- 一人だったら、きっと途中で投げ出していました。チームの仲間の存在が心強かったです。原さんたちの話を聞いて、塩尻で働くことに興味が湧きました。今度は自分から地域の人たちと交流する機会をつくれたらと思います。（小川太一さん・1年生）

### 3つの新商品を開発し地元の無印良品で展示販売・広報を展開

2022年度、生徒たちは3つの新商品を開発した。普通は廃棄されるぶどうの枝を自然のままに使った1点もののボールペン「EDAPEN」と、ぶどうの枝を活用した「枝リース」。ワインの搾りかすとしてやはり廃棄されているワインパミスを使い、肌に優しいポリフェノールなどを含んだ「信州塩尻ワイン石鹸」の3つだ。試作品制作や製造は地域事業者が支援したが、3商品のパッケージ、コンセプト、チラシ、ホームページ、動画の制作とニュースリリースはすべて生徒たちが行った。

さらに2023年2月、無印良品ツルヤ塩尻広丘の協力を得て、生徒たちは展示販売を行い、広報宣伝を展開した（写真下）。また、学校内や塩尻市コミュニティ・スクール市民集会で、取り組んだ内容を自分たちでプレゼンテーションした。地元のテレビ局や新聞社が取り組みを取材し、大きく取り上げてくれた。

チラシ

ニュースリリース

EDAPEN

枝リース

信州塩尻ワイン石鹸

無印良品ツルヤ塩尻広丘での展示販売の様子

## 塩尻西部中学校 2 年生

# 企業魅力化コーディネーター

企業魅力化コーディネーターの発表の様子

実際に生徒たちが制作した求人記事の一部分

チーフ・フューチャー・オフィサーの発表の様子

### 生徒たちが地元企業を取材して企業の魅力をチームで探究し、求人記事・動画を創る

企業魅力化コーディネーターでは、生徒たちは求人記事チームと求人動画チームに分かれて、地元企業を取材する。2023年度は取材時に先生が同行せず、学校支援コーディネーターの山本さんや塩尻商工会議所の谷田部さんが付き添いながら、子どもたちが自らインタビューや撮影を行った。

取材後は、動画編集ツールなどを使い、動画と記事の編集をチームで行った。もちろん彼らはまだ働いたことがないが、チームで協力して想像力を働かせれば、求人記事・動画を制作できるのだ。なお、いくつかの企業は、彼らの求人記事・動画を実際にコーポレートサイトに掲載してくれる予定だ。ある企業担当者からは「求人動画を見て、今の中学生はここまで制作してしまうのかと驚いております」というコメントをもらった。

## 塩尻西部中学校 3 年生

# チーフ・フューチャー・オフィサー

**各チームの提言（仮説）テーマ一覧**

- □塩尻市を子育ての街に
- □教師雇用数を増やすことで教育環境が改善される
- □地元で採れた農作物を販売できる場所や機会を増やす
- □奈良井宿をPRすることで塩尻市をより活発にする
- □地域資源を活かした交流の促進
- □伝統工芸品やワインを観光資源として有効活用する
- □域内循環システムを形成するために農業に関わる若者を増やす
- □塩尻市の食材・料理を活用して、町を活性化させていくために
- □暮らしやすい街を作るための木質バイオマス
- □医療現場や感染症に対する興味をもってもらおう！
- □災害時に防災倉庫は役に立つのだろうか
- □高齢者がたくさん活躍することができる地域にしていく

### 塩尻市の総合計画を読み解いて考察し最後は市長などに提言する

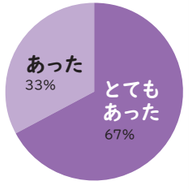
塩尻市の「未来の最高責任者（チーフ・フューチャー・オフィサー）」となり、30年、40年後の塩尻市をより魅力あるまちにするために、何をすべきかを提言していく。最初に塩尻市の総合計画を読み解き、「子育て世代に選ばれる地域の創造」「住みよい持続可能な地域の創造」「シニアが生き生きと活躍できる地域の創造」の3つの基本戦略のいずれかを選んで、チームテーマを作る。そのテーマに沿って、仮説づくり、実験・調査、考察を行い、最終的には市長などに提言する。

### 生徒たちの声❷

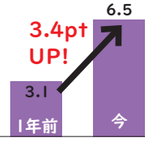
- 働くのは面倒くさいと思っていたけど、広報・メディアチームの活動を通じて、働く大人たちが世の中をつくっていることがわかりました。授業をしてくれたボランティアの皆さんに憧れています。塩尻市への興味は0.01から100になりました。（安藤日向さん・1年生）
- 私が求人動画を作った会社のことを取材前に調べたら、セラミックスを作る会社だとわかりました。工場はとても大きく、いろんな人が働いていました。仕事の面白さを伝えるため、動画に字幕をつける工夫をしました。（塩原江梨花さん・2年生）
- 清沢土建の求人記事を作りました。家やビルを建てる会社だと思っていたので、まちの除雪作業もしてくれていると知って驚きました。取材してみて、塩尻の暖かい人たちに囲まれて働くのもいいかもしれないと思いました。（義若鉄平さん・2年生）
- 清沢土建の求人記事を作りました。会社の皆さんの話を聞いて、建設業では、建てる専門家以外に、設計や測量などさまざまな専門家が力を合わせていることがわかりました。もっといろんな仕事のことを知りたいと思いました。（石井皇名さん・2年生）

### アンケート結果

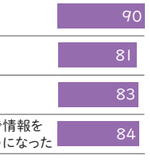
**自分にとって、学びや気づきがありましたか？**
先生・地域の事業者の変化（n=12）




**塩尻への興味・関心を10段階で教えてください**
生徒の変化（n=70）




**プログラムを通じた自分自身の変化**
生徒の変化（n=70）




出典：じゃらんリサーチセンター「地域産業を創出する探究型人材育成プログラム振り返り調査」（2023年）

# 大人たちの声

## 子どもたちの上手なプレゼンテーションや撮影に驚いた

塩尻市長　**百瀬敬** さん

私は、塩尻西部中学校1～3年生のプレゼンテーションをすべて見ましたが、現代にマッチした共創の学びだと感心しました。生徒たちが実に上手にポスターなどを制作したり、動画を撮影したり、プレゼンテーションしたりすることに驚きました。これからは一人ひとりが得意や興味を活かしながら、力を合わせる時代です。教科書では学べないことを学び、チームでやり遂げる経験は、きっと今後の人生に役立つはずです。

1年生にはふるさとぶどう学でビジネスの面白さを知り、2年生には企業魅力化コーディネーターで地元企業の魅力を感じてもらえたらと思います。特に、地元企業の経営者の皆さんは、地域を良くしたい、地域で働く人たちを幸せにしたい、という高い志を持っています。2年生が彼らの志に触れ、塩尻で働く意欲を抱いてもらえたら嬉しい。個人的には、3年生がチーフ・フューチャー・オフィサーで塩尻市総合計画を読み解き、市政を真摯に考えてくれたことに感動しました。彼らのプレゼンテーション内容は市の職員にも共有する予定です。

## 私自身も学ばせてもらった

塩尻市立塩尻西部中学校
校長　**小林真** さん

探究型教育&人材育成プログラムに取り組んでよかった。学校支援コーディネーターの山本さん、学校支援ボランティアの皆さん、商工会議所やさまざまな地元事業所などの方々とともに行えることがありがたいのです。生徒たちが、市長をはじめ学外の皆さんにプレゼンテーションできたことも喜ばしい限りです。私たちの取り組みが想定以上のうねりになってきていると感じます。

2年目になり、学内の理解も深まりました。生徒たちは、正解のない問いに真摯に向き合い、成長しています。たとえば授業が進むうちに、生徒たちは「ああしたいこうしたい」と事業所の方々に要望できるようになりました。無印良品ツルヤ塩尻広丘での展示販売も、生徒たちが「多くの人に向けて発表したい」と主張したことがきっかけで実現したものです。なかには、「動画を最高のものにしたい」と突き詰めた生徒もいます。学習指導要領が求める「主体的・対話的で深い学び」を実現できている、と感じています。

先生のなかには、この探究的な学びを自分の授業に取り入れたり、ICTを積極的に活用したりする先生がおり、学校全体が成長している実感があります。ただ一番変わったのは、校長の私かもしれません。塩尻を大事に想う多くの方々に出会えたことが、私の財産になっています。私自身も、一個人として何かできるのではと学ばせていただきました。

## 他の授業でも生徒を主役にすることが多くなった

塩尻市立塩尻西部中学校
教員　**中野直輝** さん

私は2022年度のふるさとぶどう学を担当し、2023年度は企業魅力化コーディネーターを担当しています。最初は、私も生徒たちも戸惑いました。普段の授業では明確なゴールや目標がありますが、これらの学習は明確なゴールや目標を設定しないことが、最大の価値だからです。

最初の頃、生徒たちには「やらされている感」がありました。ところが、多くの生徒はやっているうちに楽しくなり、「やりたい」に変わっていき、帰宅後にリモートで集まり、自主的に調査や制作を進めるチームまでありました。最終的には、ICTスキルも大幅にアップし、生徒たちがお互いに遠慮なくアイデアを出し合い、「もっと質の高いものを作ろう」と励まし合い、高め合える関係になっていきました。

こうした活動を行う際、教員にとって負担になりがちですが、今回は私たち教員の負担感が少なかったと感じています。私にとっては、特に学校支援コーディネーターの山本さんと商工会議所の谷田部さんの存在が大きく、二人は頼れる仲間だと認識しています。この探究学習は、協力してくれる地域の皆さんのおかげで継続できるのです。また、いろんな大人たちと関わることで、生徒たちが自信をつけるとともに、地域全体に大事にされている感覚をもったことも重要だと感じています。

ふるさとぶどう学を経て、生徒たちは「自分たちからもっと意見を出してよいのだ」とわかり、私は「生徒たちは想像以上にさまざまなアイデアや意見をもっている」とわかりました。私は他の授業でも、生徒たちを主役にするような授業づくりを心がけるようになりました。生徒が話す時間を増やし、私は生徒の考えを整理する役に回るようになったのです。生徒たちも私も、探究型教育&人材育成プログラムから多くを学んでいます。

今回のプログラムの途中で、じゃらんリサーチセンターが、学校と商工会議所のメンバーの「コ・クリエーション」の場を設けてくれたことに感謝しています。皆で集まって、お互いの根っこの想いを共有し、「地域のありたい最高の未来」が同じであることがわかったおかげで、先生方や学校支援コーディネーターの山本さんと一心同体になれました。

私たちは、協力事業者の選定やコーディネーションを担当しています。企業側も子どもたちも初めての試みですから、出だしはお互いに緊張することが多いですが、アイスブレークに成功すればうまく転がっていきます。2年生の企業魅力化コーディネーターの取材では、子どもたちが企業の皆さんに積極的に質問していく姿が印象的でした。一方の地元企業の皆さんも、生徒たちに自分の仕事について語るとき、一様に目が輝きます。実は大人たちは、子どもたちに仕事のことを語るのが好きなのです。まだ発展途上ですが、この取り組みを起点にして、塩尻に大きな変化が起こっていく可能性を感じています。

## 私たちと中学校と地元企業の想いが一緒になった

塩尻商工会議所 専務理事　**篠原清満** さん
中小企業相談所 経営指導員 新連携リーダー
**谷田部和良** さん

全国の例に漏れず、塩尻の各企業も人材不足に悩んでいます。しかし、人材が急に集まることはありません。そこで商工会議所では、以前から地元高校生のキャリア教育に力を入れており、中学生にもさらに拡大したいと考えていたところでした。探究型教育&人材育成プログラムは、まさに私たちが望んでいたチャンスだったのです。こうして塩尻西部中学校がキャリア教育に道を開いてくれたことを嬉しく思っています。私たちと中学校と地元企業の想いのベクトルが一緒になった、と感じています。学校だけでなく、塩尻全体で子どもたちを育てていく体制が整ってきました。

## 建設業に興味を持つ生徒が一人でも増えれば嬉しい

清沢土建株式会社
代表取締役社長　**清澤由幸** さん

地域の建設業は、地域に欠かせない存在です。たとえば塩尻市の除雪作業は、私たちが市から請け負っています。建設業がなくなると、除雪もままならなくなるのです。そこで最近は、建設業の魅力や必要性を知ってもらうため、いろいろな場所で話したり、高校生インターンを積極的に受け入れたりしています。今回の企業魅力化コーディネーターも、その活動の一環として引き受けました。

取材時は常務が生徒たちと一緒に建設現場に行って、現場作業を見せたり、重機に乗ってもらったり、現場監督の仕事を説明したりしました。この取り組みによって、建設業に興味を持つ生徒が一人でも増えれば嬉しい。良いきっかけになることを期待しています。

探究型教育
&
人材育成
プログラム

将来の可能性

# 本当はこういう授業を90%にするくらいの「教育のリ・デザイン」が必要だ

**探究型教育&人材育成プログラムは、そして日本の教育はどのような方向に向かったらよいのか。企業の人材開発・組織開発の専門家である高間邦男さんと、インドで「教育の再構築」を試みるマニッシュ・ジェインさんに、JRC研究員の三田がインタビューした。**

## すばらしいスタートだが もっと根本的な取り組みが重要

**——自己紹介をお願いします。**

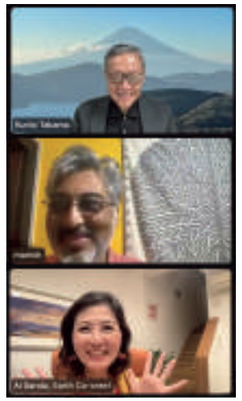
**高間**　私は、ヒューマンバリューという会社を立ち上げ、40年以上にわたり、人材開発と組織開発の調査研究とコース・ツール開発・研修・コンサルティングに携わってきました。学校教育には詳しくありませんので、今日は企業の人材育成の観点からお話しできればと思います。

**マニッシュ**　私は、米・ハーバード大学などで学び、ウォールストリートで投資銀行家として働き、UNESCOにも勤務しました。28歳のとき、それらのすべてに失望して、故郷のインド・ラジャスタン州に帰りました。以来、私は古代の叡智に基づく教育の再構築に専念し、さまざまな文脈で革新的な学びの場を創造してきました。例えば、「スワラージ大学」「刑務所大学」「複雑性大学」「おばあちゃん大学」「農場大学」などです。特に、不登校やドロップアウトした人たちとの協働が大好きです。

**——私たちの「探究型教育&人材育成プログラム」の取り組みについてどう思いますか？**

**マニッシュ**　すばらしいスタートを切ったと思います。ただ、厳しいことを言えば、もっと根本的な取り組みが重要だと感じます。

世界の急速な変化を踏まえると、既存の学校や教科書で学ぶことに大きな意味を感じません。必要がないとは言いませんが、本当は、探究型教育&人材育成プログラムのように、人生に本当に必要なスキルを学ぶことを優先した授業を90%にして、教科書で学ぶ時間を10%にするくらいの「教育のリ・デザイン」が必要です。マハトマ・ガンジーが言ったように、私たちは頭だけでなく、手や心を使って学び、そして家庭でも学ばなければなりません。ラディカルな意見ですが、あえてはっきりと申し上げます。



**マニッシュ・ジェイン**さん

インド・ラジャスタン州ウダイプールを拠点として、多様な知識体系を再生し、文化的想像力を解放し、意識を拡大するために、21世紀の新しいアンラーニングのモデルを創造することに深くコミットしている。過去25年間、シクシャンターのチーフ・ビーバー（生態系構築者）を務める。地域文化、地域経済、地域エコロジーの再生に特化したインド初の自主設計学習大学である「スワラージ大学」、刑務所に収監されている人たちに深い学びの場を提供する「刑務所大学」、世界が直面する複雑な課題に取り組む方法を研究する「複雑性大学」など、革新的な教育実験の共同創設者である。

## 企業の皆さんが中学生の話を聞く時間を設けるとよいのでは

**高間**　私はいま、「オープンダイアローグ」に注目しています。オープンダイアローグはフィンランドで生まれたセラピーの手法で、特に統合失調症の治療に高い効果を上げてきました。私は、オープンダイアローグの方法を企業の組織開発・人材開発などに応用できるのではないかと考えています。きっと学校教育の参考にもなるかと思います。

オープンダイアローグでは、患者と家族、友人、精神科医などの関係者が一堂に集まり、チームで繰り返し対話を重ねます。その際、セラピストが診断したり、解釈したりしません。対等の立場でいくつかの原則に基づいて、対話し続けることで、薬も入院もせずに症状が改善するのです。オープンダイアローグの方法を基にした対話によって、そのような変化が起きるのであれば、その原則を企業や学校でも取り入れることができるのではないかと思います。

オープンダイアローグでは、「多声性」を大事にします。対話に参加する一人ひとりが、背景や状況の異なる世界にいます。それぞれの世界はその人にとっては事実で、誰が正しいということはなく、相手の話をありのまま受け止めて聞くことが大切です。そうすると、お互いがつながった「よりどころ」となる場が生まれて、そこから新しい何かが立ち上がるのではないかと思います。

企業魅力化コーディネーターで、中学生の皆さんが地元企業にインタビューするのはすばらしいことです。さらに、地元企業の皆さんも中学生の話を聞く時間を設けると、場所が立ち上がって共創が起きるのではないかと思います。

**高間邦男**さん

株式会社ヒューマンバリュー会長。明治大学商学部卒。産業能率大学総合研究所勤務後、1985年現ヒューマンバリューを設立。2015年に代表取締役を退任し、会長に就任した。40年以上にわたり、人材開発と組織開発の調査研究とコース・ツール開発・研修・コンサルティングに携わり、日本の人材開発の質の向上に貢献すべく活動してきた。著書に『日々の易経』港の人出版・2021年、『あなたの中の「変える」チカラ』ダイヤモンド社・2010年、『組織を変える「仕掛け」～正解なき時代のリーダーシップとは～』光文社新書・2008年などがある。

## 人生の最良の先生は学校の「外」にいる

**マニッシュ**　高間さんの意見に賛成します。私の姪は日本で言えば高校卒業後のギャップイヤーで大きく成長しました。多様な地元の人や場所との出会いがあったからです。

インドには、学校教育を受けていない大人たちがたくさんいますが、彼らは植物・野生動物・農業・工芸品・精神性などのことをよく知っています。職業スキルが高い人も大勢います。姪はこうした大人たちと知り合って彼らの知恵の奥深さを知り、地元の歴史や自然を学んで世界を広げたのです。

姪や娘を見ても、私自身を振り返っても、人生の最良の先生は、学校の「外」にいると感じます。地域の大人と出会い、現実で生きるためのスキルを学ぶ機会が大切です。

## 地域の人たちと触れ合い伝統や日常を学ぶことが大切だ

**——なぜ学校の外を知ることが大切なのでしょうか。**

**マニッシュ**　学校の学びだけでは、叡智や創造性、精神性につながれないからです。食べものや地元の祭り、音楽や踊りなどを通して日常の神聖さを学ぶには、地域の人たちと触れ合う必要があります。周辺を歩いたりして、地域の土や木や川や山や海などから学ぶことも大切です。

地域コミュニティを癒し、再構築するための「古代の神聖な技術」は、おいしい料理を一緒に作って味わうこと、音楽やダンスをともに楽しむこと、沈黙と呼吸、一緒に歩くこと、自然と深く対話することの5つです。これらの技術が、私たちが生まれたのは競い合うためではなく、互いを完成させ合うためだと思い出させてくれるのです。私たちはこれらの技術を取り戻す必要があります。

**高間**　マニッシュさんの話を聞いて、西田幾多郎の「平常底」という言葉を思い出しました。「平常底」はもともと「平常心これ道」という禅の言葉からきています。私の理解では、今ここの日常生活に深く徹底して、自己の垣根がはずれると、周りのものと溶け合っていくイメージです。底でつながりあった場所が生まれると、一人の変化が周りに響いていく、一人の意識が変わるとその場所全体が変わる。それがマニッシュさんのいう新しい学習のように感じました。

## 担当研究員より考察

「地域の担い手不足」は、どの地域でも課題だろう。長野県の場合、大学進学者は71.5%が県外に出て、Uターン就職率は36.5%に過ぎない。約1/3しか長野に帰ってこない計算になる。少子化で子どもの全体数が減っている今、このままでは地域の将来が危うい。

地元に戻る若者を増やすポイントは、子どものうちに地域社会・経済への興味関心を高めることだ。そのタイミングは高校では遅い。高校は管轄が基礎自治体ではなく、生徒たちの意識も進学・就職に向くからだ。高校進学時に地元から離れるケースも多い。中学卒業までに地域への興味関心を高め、答えのない問いに向き合う探究型プログラムが大切なのだ。

このプログラムを受けると、地域の魅力的な大人たちに出逢い、地域で働く実感を持てるようになる。生徒たちは次のような感想を述べた。「働くことは面倒くさいと思っていたけど、事業者の努力に感謝の気持ちが湧いた」「ぶどうが主産業と知っていたけど、ふ～んと思っていた。今は地域の魅力と捉えるようになった」「地域の大人に憧れるようになった」。強烈に印象に残っているのは、ある生徒に塩尻への関心度の変化を「1から10で表すと？」と聞いたら「最初は0.01。それが100になりました！」と答えてくれたことだ。ふだん家族と先生以外の大人に接する機会が少ない子どもたちは、地域の働く大人たちに出逢い、ともに探究することで見方がガラリと変わるのだ。

コ・クリエーションは「一人ひとりの変容」を重視する。このプログラムでは、関わった大人たちも各々変容している。例えば商工会の方は、このプログラムが業務の一つから「使命」に変わったと言い、学校・商工会・地域の共創を楽しんでいる。新しいことは一筋縄ではいかないが、みんなが本気でコミットして変容しあうからこそ、ともに困難を乗り越えながら未来を創っていける。

今後は、市役所や教育委員会と連携をとりながら、このプログラムを市内の他の学校にも展開していきたいと思っている。他地域への展開については、仕組み化も含めて検討中だ。

じゃらんリサーチセンター
研究員
**三田 愛**
さんだ　あい

人材育成・組織開発を専門とし、集合的ひらめきにより社会変容を起こす「コ・クリエーション（共創）」研究者。官公庁での各種委員を歴任。米国CTI認定コーチ。